特別活動

学級会において，考えを広げ深める児童の育成
～思考を整理・強化する「深め合いタイム」の在り方～

新潟市立早通南小学校
斎藤　和輝（平成２７年度）

研究の概要

私は，話合い活動を通して，相手との違いを認め合い，折り合いを付けて合意形成することができる児童を育てたいと考えている。

特別活動における「対話的な学び」の実現とは，小学校学習指導要領には，「児童相互の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方や資料等を手掛かりに考えたり話し合ったりすることを通して，自己の考え方を協働的に広げ深めていくことである」とある。

そこで，「出し合う→比べ合う→まとめる」という学級会の流れの中に，考えを広げ深めるための「深め合いタイム」を設ける。「深め合いタイム」で，友達の意見をより詳しく知ることができたり，自分の考えを知ってもらおうと一生懸命に話をすることで自分自身の思考が整理されたり，思いがより強化されたりする。この「深め合いタイム」を通して，違いを認め，折り合いを付けて合意形成ができる児童を目指した。

１　主題設定の理由

経済産業省が示す「人生１００年時代の社会人基礎力」には，「考え抜く力」「チームで働く力」「前に踏み出す力」が重要であると示されている。これらの力を学校生活の中で高めていくためには，自学級の課題に気付いたり，話合いを通して折り合いを付けて結論を出したり，一つの目標に向けて動いたりする経験が必要であると考える。

しかし，これまでに私が受けもってきた学級では，「自分の思いを一方的に伝えるだけの児童」「友達の意見と関連付けて話すことが苦手な児童」「意見に対する自信がなく，全体で挙手をすることできない児童」が見られた。また，話合いが進むにつれて，流れに付いていけない児童が生まれ，「一部の児童の意見で決定してしまい，話合いが深まらない」という課題が見られた。

この課題に対して，学級会の一般的な流れ「出し合う→比べ合う→まとめる」の中に，自分の思いを気軽に語れる場面を設けることで，考えが整理・強化され，相手との違いを認め，折り合いをつけて決定することができるのではないかと考えた。

２　研究仮説

話合い活動において，思考を整理・強化するための「深め合いタイム」を設ければ，相手との意見の違いを認めたり，折り合いを付けた合意形成をしたりして，考えを広げ深める児童の育成につながるだろう。

※「深め合いタイム」とは，話合うための視点や条件を教師が与え，挙手をせずに，話したい人と，気軽に話をする時間。

３　研究の内容と方法

（１）内容

「出し合う→比べ合う→まとめる」の流れにおいて，「深め合いタイム」を設けることにより，児童の思考が深まったり，整理されたりし，より深い話合いになるのかを見取る。

（２）検証方法

・学級会ノートの児童の記述や振り返りから，思考の変容を見取り，考察を行う。

・納得軸（別紙資料参照）を用い，話合い前後での，納得軸の点の分布を比較することで，学級全体の思考の変容の傾向を見取る。

４　活動の実際

【実践 A】

「出し合う」→「深め合う」→「比べ合う」→「まとめる」の流れの中の，「深め合い」で，立場の異なる友達と考えを交流させる。

活動名「１年生との交流会をしよう」

（令和２年１０月　新潟市立小針小学校６年４組　男子１３名　女子１５名）

（１）教師の働き掛けと学級会の概要（別紙資料① 1～2 参照）

・本時の前に一度，１年生との交流会を実施し，その振り返りから「ペア」または「グループ」のどちらかで交流を行うこととなった。

・「出し合いタイム」で，「ペア」「グループ」で交流することの良さや心配な点を共有する。

・出された意見に対して，教師が論点を整理し，それぞれの立場に価値付けを行う。

・現在の自分の立場にネームプレートを貼り，なぜその立場なのかを「深め合いタイム」で話し合う。

・「比べ合いタイム」で，「深め合いタイム」で話した内容や考えたことなどを話し，合意形成に向かう。

（２）「深め合いタイム」の実際

教師が活動を「ペア→責任感・相手を思う力」「グループ→自主性・まとめる力」と価値付けた後に，以下の視点と条件で「深め合いタイム」を設けた。

視点：活動の価値についてどのように考えるか。
条件：立場が異なる人と「１対１」もしくは「１対複数」で話す。

気軽に友達と関わる場があることで，活動の価値と自分自身の成長について考え直したり，立場が異なる意見にも寄り添う意見が出たりした。以下は，「出し合いタイム」と「深め合いタイム」後の児童 A の発言である。

「出し合いタイム」での児童 A の発言
グループでやってしまうと，１年生と話さない６年生が出てきてしまいます。ペアの場合は，話す以外の選択肢がないからペアでやった方がいいと思います。

「深め合いタイム」後の児童 A の発言
（グループで身に付けることができる）まとめる力というのは，将来地位が高い立場でしか活用できませんが，（ペアで身に付けることができる）相手を思う力は，どんなときにも活用することができるのでペアがいいと思います。

このように，活動の具体ではなく，活動の価値について考えを深める姿が見られた。

（３）実践での児童の思考の深まり

グループで交流したいと考える児童が大半を占めたため，司会団がグループでの交流で決定しようと話を進めた。しかし，しかし，児童 A は納得できない様子だった。全員の納得感がないままでの決定になってしまうため，児童 A の心配な点を解決する方法を再度，近くの人と相談する時間を設けた。その後，

将来より大切になってくるのは，まとめる力（グループ）。でも，最終的にはどちらも目指したい。だから，他のクラスも呼び，６年生１人に１年生２人で行えば，責任感とまとめる力が同時に付く。でも・・現状難しい。第２回はグループで行い，第３回，第４回のときにペアで活動し，それが達成できたら他のクラスも呼べばよい。

という意見を児童 B が述べ，少数派である児童 A も納得する決定をすることができた。

（４）実践から見えた課題

本時で，考えが深まったといえる場面は，教師の意図した「深め合いタイム」ではなく，「まとめる」場面で，心配な点を話した児童の思いを解決しようと，近くの人と自由に相談した時だった。こ

のことから，合意形成に向かう場面で「深め合いタイム」を設けることがより有効なのではないかと考えた。そこで，実践Ｂでは，「まとめる」場面で「深め合いタイム」を設定することとした。

【実践Ｂ】

「出し合う」→「比べ合う」→「深め合う」→「まとめる」の流れで，教師が提示した視点についての意見をもち，「深め合いタイム」で共有する。

活動名「ロクノニクエストレベル１～もっと仲良くなれるお楽しみ会の内容を決めよう～」

（令和４年７月　新潟市立早通南小学校６年２組　男子１６名　女子１５名）

（１）教師の働きかけと学級会の概要（別紙資料② 1～2 参照）

・「出し合いタイム」で，「体を動かす遊び」「つくる遊び」の良さを共有する。

・「比べ合いタイム」で，反対意見や心配な点を共有し，解決策を話し合う。その後，教師が論点を整理し，「体を動かす遊び→狭く・深く仲良くなれる」「つくる遊び→広く・浅く仲良くなれる」と価値付けを行い，比べ合いタイムを継続する。

・「まとめる」場面で，納得できない児童がおり，学級としての結論が出なかった。そこで教師が「今の学級に優先するべきことは何か」という視点を与え，意見カードを記入する。

・「深め合いタイム」で交流を行い，より多くの人が納得できる結論について，視点を基に話し合った。その後，全体共有を行った。

（２）「深め合いタイム」の実際

「まとめる」ことができずに，司会団とフロアの児童が合意形成の必要感をもった状態で，以下の視点と条件で「深め合いタイム」に入った。

視点：今の学級に優先するべきことはなにか。
条件：立場が同じ人２名以上，異なる人２名以上と話す。

「深め合いタイム」ので児童 C･D 発言

C：（体を動かす遊びで）みんなが仲良くなっていって，（つくる遊びで）一番最後に６年２組の最高の思い出をつくりたいんだよね。D はどっちがいいの。

D:どっちでもいいかも。それぞれに良いところがあるから・・。

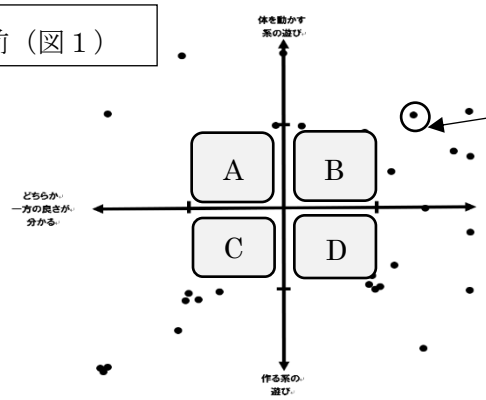
実践Ａでは，「深め合いタイム」を学級会の流れの一場面としか捉えていない児童が多かった。しかし，実践Ｂでは，「このままでは話合いがまとまらない」と，合意形成をするために「もっと話したい」という児童の必要感があった。このことから，「まとめる」際，児童の必要感が高まった場面で，教師が示した視点に基づいて「深め合いタイム」を行うことは有効であったと考える。

（３）話合い前後の児童の納得軸の変容（別紙資料②－３－（５）参照）

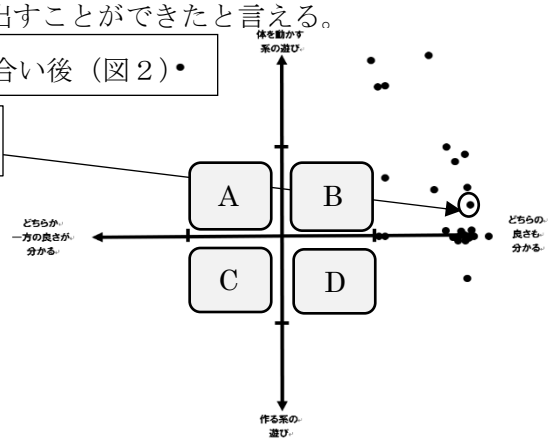
以下が話合い前後の納得軸の分布の比較である。

話合い前は散らばりが見られる。特に「A」「C」の区分に 11 人が点を打っていることから，話合い前は，どちらか一方の良さのみ分かる児童が多くいることが分かる。話合い後の分布を見てみると 1 人を除いた 27 人が「B」「D」の区分に点を打っている。「B」の区分に多く点があることから「体を動かす遊び」が良いと思っている児童が多いと言える。しかし，これは「作る遊び」の良さも理解した上での思いである。本時の話合いを通して納得解を出すことができたと言える。

話合い前（図１）



話合い後（図２）



次にいつ（「出し合いタイム」「比べ合いタイム」「深め合いタイム」）考えが変容したのかを，児童の振り返りの記述から見取った。

出し合いタイム	比べ合いタイム	②における深め合いタイム（その後の全体共有を含む）	変容なし	記述なし
２人	７人	１８人	１人	１人

「出し合いタイム」での変容は，友達の発言から新たな気付きを得て，変容したと記述があった。「比べ合いタイム」での変容は，異なる立場の心配な点を共有し，その解決策が出されたことで「どちらの良さも分かる」に近付いたという記述が多かった。

「深め合いタイム（その後の全体共有を含む）」では，別紙資料②「３．学級会の様子④」の児童 C・D の２人の発言によって変容した児童が多かった。授業後に，多くの児童の考えの変容を生んだ児童 C・D に話を聞くと，２人で「深め合いタイム」で話している際に，児童 C が「広く・深くを目指すこと」，児童 D が「つくる要素も入れること」を思い付いたと述べている。

以下は「深め合いタイム」で児童 D の発言によって意見が変容した児童 E の振り返りの記述である。

> 児童 E（変容の様子は図１・２参照）
> 僕は、最初の出し合いタイムでつくる側の人の意見にはあまり賛成しませんでした。（中略）体を動かす遊びでは、体を動かすのが苦手な人も得意な人に守ってもらえるという意見に賛成していたからです。深め合いタイムでは、D さんの話を聞いてすごく頭がスッキリしました。理由は、僕が体を動かす系にすると作る系の人ができなくて残念だなと思ったからです。なので，D さんが言っていたこと（別紙資料②３④参照）が，僕が考えていたことを解決してくれる意見だったからで

「出し合いタイム」と「比べ合いタイム」では考えの変容が見られなかった児童 E は，「深め合いタイム」後の，全体共有の場面での児童 D の発言によって，変容が見られた。

5　結論

実践 A では，「出し合いタイム」後に「深め合いタイム」を設けた。その後の「比べ合いタイム」では，「深め合いタイム」で話したことを共有するだけとなり，深まった話合いにならなかった。実際に話合いに深まりが見られた場面は，少数派の児童の困り感が表出され，納得させようとした「まとめる」の場面であった。

実践 B では，学級としての結論が上手くまとまらず，「もっと話したい」と必要感をもった場面で「深め合いタイム」行った。多くの児童に考えの変容が見られ，より多くの児童が納得した結論を導き出すことができた。

このことから，「深め合いタイム」は，児童が話すことの必要感を感じやすい合意形成の「まとめる」場面の中で，教師が示した視点に基づいて行うことが有効である。

6　課題

児童の振り返りから，「深め合いタイム」で聞き手に徹していたという記述が見られた。自分の考えを自由に話すことで考えが整理・強化されると考えるため，「深め合いタイム」のより有効なルールについて今後の実践の中で明らかにしていきたい。

また，別の議題（AorB ではない話合い）の際にも有効であるのか実践を続けていく。

7　参考資料

・「みんなで，よりよい学級・学校生活をつくる特別活動　小学校編」
文部科学省　国立教育政策研究所教育課程研究センター
・「人生１００年時代の社会人基礎力について」平成３０年２月　経済産業省　産業人材政策室